

士道不覚悟

「……じ、そうじ！いつまで寝てるつもりだ！」

聞き覚えのある声が頭の上からふってくる。

聞き覚えがあるというののは、わかるが、それが誰の声なのか思い出すことができない。

（今日、僕、掃除当番だったっけ？）

（誰の声だろう？バリー・せんばいじゃないし……）

声の主が思い出せないのは、無意識のうちに『わかりたくない』という思いがはたらいていたのかもしれない。

たとえ、そこにいるのが誰であったとしても、今は眠っていたい。

それでも声が『そうじ・そうじ』と僕を揺り起こそうとする。

（やたら『そうじ』って繰り返してるけど僕の名前は六道リインだし……）

もちろん、ジョーカーが優しく起こしてくれるなら、文句なんかいわずに起きるけれど、そうじゃないなら断固眠っていたい。薬物中毒の暴行犯を追って夜通し街を走り回って、午前3時によく布団に入ったばかりだというのに、少しくらい仮眠時間をくれたって罰は当たらないと思う。

「あと五分……」

「寝ぼけてるんじゃないか！」

罵声と同時に布団を剥ぎ取られた。

僕は手を伸ばして布団にしがみつこうとしたが、足蹴にされてしまった。

「酷いなあ。何もここまでしなくたって」

文句を言いながらもしぶしぶ目を開いた僕が見たものは、にわかには信じ難いものだった。

なぜ、これがここにあるのか。

博物館ではなく警察の仮眠室に——歴史の本で見たことがあるだけだけど、一度見れば他のものと見間違えようのない浅葱の羽織。白い山形がついたそれは、新撰組の隊服。

僕は視線を徐々にあげた。

よく見慣れた、でもあまり出会いたくない貌がそこにあった。特捜司法官S・Aの貌が。

「S・A、その格好……」

口を開きかけた僕の言葉は

「このバカ！まだ目が覚めないのか！」という怒声にねじ伏せられた。

サビのきいた声に思わず首をすくめた。

同時に自分の着ているものが目に入った。

だらしなく胸がはだけている代物は、どう見てもK I M O N Oと呼ばれるものだと思えない。今から三百年以上も昔、日本州では日常着だったというものだ。

（これは僕の夢の中だろうか）

そうとしか考えられない状況だった。

僕が仮眠する時に着ていたのは、半袖のシャツだったはずだ。夢でもなければ、こんなものを着ているはずがない。博物館入り間違いなしものを僕は持っていない。

目の前にいる人物もS・Aに違いないと思うのだが、ヘアスタイルは、ポニーテールと呼ばれるものに似ている。話し方の調子も少し違っている：ような気がする。

もっとも僕に向かって口を開く時には、S・Aはいつもシニカルな物言いだから、大幅に違っているというわけではないが、そのうえに誰人をも近寄せないような厳しさがある。（夢ならば覚める方法もあるはずだ。こんなわけのわからない夢なら、どんなに眠くても起きてしまったほうがマシというものだ）

どうすれば目覚めることができるのだろうか、考えを巡らせているところに

「歳さん、そんなに怒鳴ってばかりでは、総司も返事できないだろう」

襖の陰からもう一人の人物が現れた。総髪というのか――月代を剃り上げないで髪を結ったままにしている人物で、テレビ・ドラマ『特捜司法官S・A』の主演俳優の面影を宿していた。

「近藤さん。総司には、これくらい言ってちょうだいんですよ。こいつとききたら、まったくいつもぼんやりしてるんだから……」

二人の会話から察するに、ここにいるのは正真正銘、新撰組局長・近藤勇とその懐刀、副長・土方歳三であるらしい。

「土方さん……ですすよね」

なんとか現実を把握しようと言った僕に

「ほら、この調子だ」

あきれ返ったといわんばかりの返事だった。それでも、その言葉から、ここにいるのが土方歳三に間違いないということだけは確認できた。

そして――

そうじと呼ばれている僕が沖田総司ということになるのだろう。幕末の剣豪の一人に数えられているという沖田総司と僕とではイコールで結べる共通点などありはしない、と思うのだが、こんな訳のわからない状況では、しばらくの間、彼の役を演じているしかないだろう。このやけにリアルな夢から覚める方法が見つかるまでは。

「総司、具合でも悪いのか？」

近藤さんが僕の眸を覗き込むようにして尋ねた。

僕は首を横に振る。

具合がいいのか悪いのかさえ、今はまだ、よくわからない状態だった。どことなく身体がだるいような気もするが、それは後世の僕が彼の死因を知っているせいなのかもしれない。「熱はないようか？」

僕は、ぼんやりと肯いていた。

そのやり取りを土方さんは睨み付けるようにして見ていた。どうやら、僕はこの人に嫌われているようだ。

以前、ハイスクールの『地球史』で習った記憶が正しければ、僕も彼らと同じ道場で学んだ仲間のはずだが、それは、後世の歴史家の誤りじゃないかと思ってしまうほどに冷たい眸だった。

土方さんの僕に対する態度と、近藤さんに対する態度には雲泥の差がある。もちろん、局長に対するには、それなりに敬意を払った物腰になるのは当然のことだけれど、実質的に新撰組を動かしていたのは、土方歳三だったはずだ。

でも、僕の目の前の二人を見てみると、そういうわけでもないように感じられる。

結局のところ、後の時代になって学ぶ歴史なんて、真実からかけ離れているのかもしれない。

「総司は一番隊の頭だろう？他の隊員たちは皆市中の見回りに出かけて行ったぞ。総司がいつまでも寝ていては、他の者に示しがつかんだらう。具合が悪くないのなら、しっかりと働いてくれよ」

言い聞かせるような近藤さんの言葉に送られて、僕は屯所を出た。

完全舗装された道路を靴を履いて歩くことに慣れている僕には、土の道を歩くというのはとても珍しい経験だ。

信じられるだろうか！土の道というのは、歩きたびに小さく埃がたつのだ！道の脇には雑草が生えている。プランターに植えられたのではなく、道に直接生えている草。規則正しさとは無縁だが、そのぶん生命力にあふれている。人に見せるためのものではない小さな・小さな花が咲いている。これが自然というものなのだ！二十二世紀に生きる僕たちが自然だと信じていたものがいかにインチキで人工的に作り出されたものであるのかということに僕は初めて知った。

整然と植えられた街路樹――

人工交配で殖やされた鮮やかな色彩の小鳥――

電照によって開花時期を調整された観賞用の花――

それらのものは、見せ掛けの自然でしかなかったのだ。

（ああ、僕は、これまでいかに知らないことばかりだったのだろう）

自分が無知であったことを思い知らされた。

だが、無知であることを知るのには、ちっとも不快ではなかった。何も知らないのなら、これから一つずつ覚えていけばいいのだと思うことができた。

僕は道端にしゃがみ込んで草を眺めてみた。ひしゃげたような形の葉っぱには土埃がついていた。人が道を通るたびに埃を巻き上げるせいなんだろうけれど、それにも負けずにひたすらに生きているのだ。

葉っぱを一枚ちぎると青臭いにおいがした。

（これが本当の植物のおいなんだ）

僕は自然に酔ったような気分になっていた。

こんなところを土方さんに見られたら、また、どやしつけられるだろうけれど、新しい発見や、はじめての経験に感動しないようじゃ人間じゃない、と思う。

何を見ても珍しく、大地を踏みしめる一步一步が嬉しくてウキウキと歩いていた僕は、周囲の人の目には、さぞかし可笑しなものに映ったことだろう。

泣く子も黙ると言われる新撰組の隊員が嬉しそうに歩いている図なんて想像できない事柄に違いない。人々は道を通るにも僕の周りに近づかないようにしていた。

今になってはじめて気付いたんだけど、道を行き交う人達はみな背が高くない。

大多数の人がそうなのだから、僕はこの時代ではとびぬけて背が高いということになるのだろう。

なんだか変な気分。

そうでなくても目立ってしまうのだから、あちこち見回しながら歩いていては、他の人からはさぞ可笑しなものに見えるだろう。気をつけなくてはいけないと思う。だが、そう思ったあとから、ハーネスをつけないで勝手気ままに歩いている犬だとか、赤いよだれかけを掛けたお地藏さんや小さな祠だのが現れて、僕の興味をひく。

そんな時、ふと道端にしゃがみこんでいる人がいることに気付いた。

鹿の子絞りの着物に桃割れの髪——それは若い娘にだけゆるされたものだった。

なぜ、そんな言葉を知っているのかなんて詮索してみてもはじまらない。

目にした瞬間にそれらの言葉は、当然のように僕の中に沸きあがってきたのだから。

沖田総司として生きることを運命付けられた僕が知っているのは、ある意味、極めて当然のことなのだろう。

その娘は、どこか痛めでもしたのか、顔色が青白くなっていた。額には汗が浮かんでいる。

「大丈夫ですか？」

京の町で新撰組がどんな目で見られているのか、知らないわけではなかったが、僕は声をかけた。

困っている人を見て、知らんふりしていることのほうが失礼だという気もした。

「急におなか痛うなって」

それだけ言うのも辛そうだった。

「お家はどこですか？よければお送りしますよ」

「……」

返事がない。

（僕のことでも人斬り集団の一人として見てるんだ）

チクリと心が痛んだ。

（新撰組の面々、近藤さんを筆頭に土方さん、芹沢さん、原田さん、斎藤さん……皆それぞれ沢山の人を斬ることになるけれど、斬ることを楽しんでた人なんて誰一人としていないはずだ。彼らは、彼らなりに激動の時代を精一杯に生き、先のことなど何もわからないままに幕府のために、よかれと信じて戦い続けただけなのに……）

この思いは、たしかに後の時代に生まれた僕だからこそ抱きうる考えかただけれど、それでもやはり寂しかった。

「どなたかにお迎えに来てもらいますようか？」

これにも少し沈黙があったけれど、ややあって

「すぐその……葉村屋です……」

「わかりました」

僕は娘に肩を貸して立ち上がった。

立ち上がったものの、娘の言う葉村屋への道がわからない。

「すみません。僕、このあたりの地理に疎いので。道、教えてもらえませんか？」

僕の言い方がおかしかったのか、娘はクスリと小さな笑みをもらした。

「その角を曲がったとこです」

商家の暖簾が連なるなかに柏の葉をかたどった暖簾が見えた。『呉服問屋』の文字も書かれてあった。ここが娘の家であるらしい。

「翔お嬢はん」

店の小女か、娘の小間使いと見える少女が駆け寄ってくる、僕の手からもぎ離すようにして店の中に娘を押し込んだ。

「えろうお世話さんどした。おおきにありがとうさん」

札の言葉も、その表現しだいでは拒絶の表現になりうるといふ見本のような言い方だった。これ以上僕に一言だつて話をさせるまいという意思がありありと現れていた。

「ふぎ、そんな切り口上でもの言うんやおへん」

店の中からたしなめる声が聞こえていたが、それだからといって誰かが外に出てくるわけでもなかった。

（みんな僕とかかわりあいになることを避けているんだ）

心が重かった。

実際のところ、避けられているのは、新撰組の隊服であり、それを着ている沖田総司であるわけだが、僕自身が避けられているよりも哀しかった。

（どうにかして皆にわかつてもらう方法がないものかな）

僕は考えてもどうしようもないことを考えていた。

歴史は変えようがないし、また、変えようとしてはいけないのだ。二十二世紀の人間である僕が彼らのためにできることなど何もありません。それはよくわかっているけれど、それでも彼らのために何かしてあげたいというのも偽りの無い思いだった。

そんな僕の物思いを遮るように突然後ろからフツ・フツ・

フツという笑い声が聞こえた。

振り返らなくても、そこに誰がいるのかわかっていた。

こういう笑い方をするのは、芹沢さん以外にいない。

（できることなら、振り返らずにこのまま走り出したい）

でも、そんなことをすれば、屯所に帰ってからネチネチといびられることになるのは、目に見えている。

泣きたいような思いを押し隠し、唇の端をひきつらせながら笑顔を作るとゆつくりと振り返り向いた。

案の定、嬉しそうな笑顔の芹沢さんがそこにいた。

「見ましたよ、総司くん。君もなかなか隅に置けないねえ。葉村屋のお嬢さんとは、なんだか訳ありの様子だったじゃないか」

「そんなんじゃないですよ。おなかが痛いつて言うから送ってきただけで……」

「まあいいでしょう。そういうことしておきましょう。近藤さんや土方くんにはバレると、うるさいから」

言いながら、芹沢さんはぐいと僕のほうに身体を近づけてきた。

がっしりとした体格が僕を威圧する。ことに厚い胸板と割れ顎が男らしさを強調している。

「芹沢さんは見回りの途中なんですか？」

僕は市中見回りを口実にして芹沢さんから逃れようとしていた。

「僕はまだこれから回らなくちゃならないんですけど……」

「土方くんには、わたしから上手く話をつけてやろう。少々つきあわんかね」

言いながら芹沢さんは酒を呑むしぐさをしてみせた。
「昼間からお酒ですか？」

呆れ顔の僕にも芹沢さんは平気な顔で

「なに：ほんの少々たしなむ程度だよ。隊務に差しさわりが
あるほど呑むはずがないじゃないか」

結局、僕は、付き合うとも付き合わないとも言わないうちに
近くの小料理屋に連れ込まれていた。

『ほんの少々』と芹沢さんは言ったが、うわばみだといわれ
る芹沢さんの『少々』というのは、普通の人間なら完全に酔
いづぶれる量の二・三倍に相当するのだった。これまで芹沢
さんと呑んだことのない僕が驚くほどのピッチで酒を流し込
み、合間に様々な料理に箸をつけ……僕は、見ているだけで
食傷してしまう有様だった。

「総司くん、きみ、なにほども呑んでないし、食べてもない
んじゃないのか。そんなことだから細っこいままなんだぞ。

まあ、きみにはそれが似合つとるし、太った総司くんとい
うのは想像もつかんが」

「あの……ごちそうさまでした。僕、まだ見回りが残って
るで……」

じりじりと襖のほうににじり寄りながらいとまごいをしよ
うとしていた僕は

「本題はこれからなんだ」という芹沢さんの言葉と同時に座
敷に引き戻され、押し倒されていた。

「どうだね。動けまい」

くやしけれど、僕は身動きすることができなかつた。芹
沢さんに掴まれている手首は、まるで機械で挟みつけられて

でもいるようで、指先がしびれてゆく。それにともなつてど
んどん冷えてゆくのがわかる。足のほうは袴を押さえつけら
れている。

（この怪力、とうてい同じ人間とは思えない）

（僕ってこんなに非力だったんだろうか）

大人に押さえつけられている子供でももつと抵抗すること
ができるのではないかと思う。

芹沢さんは唇の端に満足そうな笑みを浮かべると、僕にお
おいかがぶさつてキスしてきた。

（やだ！こんな状況で芹沢さんにキスされたくない！）

抗おうにも、芹沢さんの唇はねつとりと僕の唇を覆いつく
している。

手も足も動かせず、ただ芹沢さんの欲望に身をまかせてい
るしかないなんて！

（ジョーカー！）

心の中で精一杯大きな声で叫んだ——いや、本当に声に出
していたのかもしれない。

『リセット・コードがインプットされた』

どこか遠くから聞こえた声は、機械的で冷たかつた。

（リセット・コード？ インプット？）

とてもよく知っているはずなのに、それが何なのか思い出
せなかつた。

次の瞬間、世界がグニヤリと歪んだ。

芹沢さんの姿がほんの一瞬キャプテン・ゴートの姿になつ
たかと思うと、次の瞬間にはそれさえも崩れて、誰とつかぬ
人物になり、更に人とも物ともつかぬ塊へと変じた。そして

それはしだいに色を失って消えた。

それから目の前に小さな点が浮かび上がったと見る間に人間の姿をとり始め、ジョーカーの——女性型のジョーカーの姿になった。

(これもまた夢なのだろうか?)

僕は、夢から覚める方法を探していたはずだった——ED O I I E R A にタイムスリップして沖田総司になったなどというわけのわからない夢から覚める方法を。

でも、いま僕が目になっているのが真に現実なのだと、どうして言えるだろう。

「リイン? リイン、気分が悪いんですか?」

ジョーカーが心配そうな表情で僕の顔を覗き込んでいた。

僕はゆっくりと首を横に振った。

沖田総司の役を振り当てられたその最初の時も気分がいいのか悪いのかよくわからない状態だったが、今はそれ以上にわからなかった。僕が自分のものだと思っていた身体も本当は誰かからの、あるいは、どこかからの借り物ではないだろうかという疑問を打ち消すことができない。

「もうちょっと粘るかと思ったが、案外早くギブアップしたな」

「S・A、そんなことを言うものではありませんよ。ヴァーチャル・リアリティの実験に協力してもらってるんですから」

ようやく僕は自分のおかれている立場を思い出した。

ドリーム・プレイング・ゲームやヴァーチャル・リアリティの人体に及ぼす影響をデータ化するために僕はモルモット役をとめているのだった。

(たとえ、これが入れ子の夢であろうとなかろうと、いま自分の前にあるもの、それこそが僕にとつての現実、僕にとつての真実なんだ)

僕は小さく首をかしげているジョーカーを抱きしめた——

S・Aの睨みつけるような視線を感じながら。

その姿勢のまま僕がジョーカーにささやく。

「さっきの……あの中にはS・Aが登場していたよね、土方歳三役で。秋津さんもいたと思う。もちろん、ジョーカーもいたんだよね?」

確かめる僕の言葉にジョーカーが小さくうなずいた。

「もしかして……」

確かめたいような確かめたくないような自分でも複雑な思いのまま一人の人間の名前を言う。

これにも、もう一度小さくうなずいた。

(もしもあの時ジョーカーの名前を呼ばなかったら、芹沢さんになっていたジョーカーと××することになっていた?)

S・Aにモニターされたままで?!

「ジョーカーのいじめっこ……!」

叫ぶ僕とS・Aの視線が絡まった。

彼は単に、薄く笑いを浮かべただけだった。

(いったい彼は何を考えているのだろうか?)

ふと浮かんだ疑問を胸に、僕はジョーカーを抱く腕に力を込めた——僕にとつての真実を逃がさないために。